

第31回全国交流集会・基調(案)

～次世代とともに、次への一步へ～

次世代へ組織的な運動の継続を

第31回全国交流集会は、様々な困難を乗り越え、昨年第30回全国交流集会の歴史的にも一つの区切りとなる集会の成果を踏まえ、友の会運動・大衆学習運動の中間総括の場として、成果と不十分さを確認し合える集会にしたいと思います。

ただ昨今、中心的に友の会運動を担っている方々が高齢化し、健康上参加できない仲間、家族の健康上の問題でやむなく参加できない仲間もいます。課題は、今年のスローガンにあるように「継続は力、次世代とともに創り、次への一步へ」であり、現役世代への大衆学習運動の広がりをもつて、勇気と行動をもって実現していきましょう。

私たちの運動を継続発展させるためにも、次の世代へいかに引継ぎ、継続させるかを考えると、やはり労働者運動の再建を長期的に見据える必要があります。

組織的な団結の絆は、信頼です。粘り強く、現役世代といかに関わりをもつてどう運動を進めるかを、真剣に考え行動することを、中心に討論したいと思います。

衆院選結果は、民族主義的国家主義へ

衆議院選挙の結果は、驚きと怒りです。自民党が単独で3分の2を超える316議席の圧勝で、選挙直前に公明党と立憲民主党が立ち上げた中道改革連合は、167議席から49議席へと壊滅的大敗です。11もの政党の乱立と、私たちの力不足もあり、護憲勢力の大きな後退と「立憲民主党」の裏切的行為です。立党時の「安全保障法制の違憲部分の廃止」「原発ゼロ」をかなぐり捨てて、安保法制を容認し、存立危機事態を合憲とし、原発容認へと、大転換した中道改革連合なる政治姿勢に、多くの勤労国民は失望しました。

一方で、高市人気に丸乗りした自民党、「責任ある積極財政」を謳い、「自らの国は自らが守る」「非核三原則の見直し」「武器輸出」「日本国国章損壊罪」「国家情報局の設置」「憲法改正に向けた挑戦を強める」等と、強い姿勢で打ち出した民族主義的国家主義が、異常なほど多くの支持を受けた結果に、危機意識を強く感じます。

私たちは、極右政権に通じる隷属、従属への流れを止めなければなりません。戦後培ってきた平和と民主主義、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義の日本国憲法の危機を押し返す力を創る以外にありません。あらためて国民的議論が必要です。

デマと差別が蔓延する社会にしてはならない

政治情勢として、排外主義の浸透が拡がっています。その根底にあるのは、社会的諸矛盾の拡大、経済的な不安定さの広がり、心理的な将来に対する不安、社会的疎外感、などが大きな社会的基盤になっています。2000万人を超す非正規労働者、長時間労働、生活必需品の高騰、福祉の切り捨て等々、経済的に困窮している人々が拡大してい

ます。

排外主義は、社会に対する不信感、不満、要求、怒りを、移民・外国人への敵対的、攻撃的な対応で、大衆の意識を外に向ける風潮を煽り立てているのです。

その流れは、高齢者や社会的弱者への福祉政策にも、厳しい視線が向けられています。さらに、政府の政策に反対する人々、平和を求めるより広い層への攻撃として、人権や言論の自由への制限につながる可能性を強めています。

世界的にも自国第一主義の右翼ポピュリズム政治が拡大しています。この傾向は、戦争への道につながる危険性を高めています。軍事費の拡大、徴兵制、マスメディアへの規制、異論を唱える勢力に対する「非国民」「スパイ」呼ばわり、国家による統制を正当化する動きが強まっています。デマと差別が蔓延する社会にはなりません。

求められるのは、経済的不安を軽減する民主的政治、すべての人々が平等に個人として尊重される社会、他文化共生の価値観をもてる社会的教育です。額に汗して働く人々による労働者運動を各職場や地域で活かすことが、人と人との関わりを大切にする民主主義社会を築く力になります。

学習と相互討論こそ、友の会運動

大衆学習運動は、労働者としての自覚に目覚める運動であり、「労働者として生きること誇りを持てる人間になろう」ということです。その中心は「学習と相互討論」です。相互討論は、人の意見を尊重し自分自身の意見・考えを出し合うことによって、お互いの理解を高め合っていくものです。「自分の頭で考える」「心と言葉が一致する」ように努力することが大切であり、新しい発見も生まれます。「相互討論」は、組織的な団結への第一歩です。「一歩ふみだす、勇気と行動を！」は、第30回全国交流集会のスローガンでした。

お互いが学び合い、認め合うということは、信頼し合うということであり、必ず空気を変え、仲間の心をつかむ力になります。そこに人はつながり、心と心が結び合い、組織が生まれます。組織するということは、仲間の心を捉えることです。信頼です。

めざすは、社会主義運動、労働運動の強化をとおして、日本における社会主義社会の実現を目的とした運動である、と位置づけてきました。いわば、階級闘争前進への基盤づくり、土壌づくりであり人間性回復のたたかいです。

資本や支配階級が最も恐れるのが、労働者が権利意識を持ち、職場や社会の不平・不満や怒りを組織的な力にすることです。したがって、資本の攻撃的的は、労働者の権利意識と労働者思想の排除と根絶です。この一点にあると言っても過言ではありません。

運動の論拠、「四つの課題を三つにまなぶ」

第一に、私たち労働者階級こそが、社会の主人公、職場の主人公である、ということです。当然に、主人公にふさわしいように、人間らしい生活をする権利がある。人間らしく働きつづけ、生きつづける権利がある、ということです。

第二に、にもかかわらず、私たちの生活は大変貧乏であるし、不安定である。つまり、働きつづけ、生きつづける権利が保障されていない。その原因はどこにあるのか、という課題です。それは、資本主義社会のしくみそのものに原因があるということです。

第三に、社会のしくみそのものに原因があるとするれば、労働者階級を中心とする組織された力を強化するなかで、たたかいをとおして、社会を変えていく以外にはありません。

第四に、たたかいの展望、そのたたかいは、歴史的な法則にのっとりたたかいであり、必ず勝利する、ということです。

こうした四つの課題を、私たちは学習運動のなかで、古典にまなぶ、資本にまなぶ、仲間まなぶ、という三つの基本的方向をうたえてきました。それは、個々バラバラのものではなく、相互に密接なかかわりを持っています。

「古典にまなぶ」ということは、マルクス、エンゲルス、レーニンの思想にまなぶ、ということです。「資本にまなぶ」ということは、資本主義社会のなかで具体的事実として、どのようにあらわれているかを確認していくということです。資本にまなぶためには、仲間との討論のなかで検証しあっていくことが重要です。そのことが、「仲間まなぶ」ということの意義でもあるのです。

第一学習会は、小さな団結づくり

『月刊まなぶ』3000部拡大運動は、資本に対する怒りを組織する運動です。しかし、様々な困難な条件や要因がありますが、現状、減部数の傾向が続いています。あらためて内外の五人組運動、人間関係づくり、相互討論の重要性が求められており、みんなで真剣に取り組む継続的な課題であり目標でもあります。

私たちの運動は、県協や地区協、単位友の会の長期方針という積み上げの運動であり、一人ひとりの個性を生かしながら具体的な運動を進めていきます。これが、年間方針づくりです。さらに、具体的に踏み込んだ討論にまでなっているのか、この具体的な課題が、第一学習会で信頼関係に裏打ちされた相互討論で検証されているのかが問われています。

組織的な運動とは、丁寧な総括運動を繰り返し積み上げていくこと、「方針の実践は、総括の歴史である」（灰原茂雄）と言われています。当然のこととして、方針のないところには総括もできません。正しい方針は、正しい総括から生まれてきます。これが積み上げの運動です。

私たちの構えは、徹頭徹尾「仲間まなぶ」という姿勢、日常的活動が基本です。いわば仲間の悩みや苦しみ、苦情や怒りの声を、粘り強く聞くことから、具体的な課題が明らかになってきます。仲間を思いやる気持ち、そこに信頼し合える人間関係が生まれます。そのためにも、学習会の都度に出し合うお互いの近況報告の継続性を、もっと重視する必要があります。近況報告の多くは、出しっぱなし、聞きっぱなし、になりがちです。

第一学習会の在り方で、学習半分、近況報告半分を実践し、記録に残し継続討論にしている友の会もあります。「自分のことを真剣に聞いてくれる」「悩みを一緒に考えてくれる」等の声があり、「学習会が待ちどろしい」という成果も出ています。

会員の任務は、資本への怒りを組織すること

まなぶ友の会運動、大衆学習運動では、友の会・会員一人ひとりが、担い手としての任

務を自覚するとともに、人間的な成長に努力することが大切です。

問題は、会員が、会員の任務を自覚し、日常的に目的意識を持った運動や生活態度を持てるかどうかです。いわば友の会運動を自分の生き方にするということです。困難のりこえて自発的に自分の問題としてやりぬく、こういう理解と認識、自分の頭で考える構えが担い手の中身です。

あらためて「会員の任務とは何か」を、再認識することが求められています。一つには、友の会運動の担い手であり、大衆学習運動の組織者であるということです。二つには、会員相互の団結づくりです。日常的な相互討論や家族ぐるみの交流をとおして、目的に向けた全国的な団結をつくることです。三つには、もう一人の仲間づくりです。

『月刊まなぶ』拡大運動は、資本への怒りを組織する運動です。怒りは、力の源泉です。自らのたたかいでもあり、温もりある団結です。

継続性と組織的發展を

三池の長期抵抗大衆路線を一言でいうならば「たたかいの中で組織する」ということだと言われています。自らが、たたかいの中に身を置く構えなくしては、非常に困難な課題です。大衆路線の構築を通してのみ、社会変革を実現する道であり、大衆路線を通して大衆運動に転嫁することが、労働者運動にとって大切な展望です。

まさに私たちの運動は、継続性と組織的發展が重要です。指令・指示の運動ではなく、真実に対する謙虚さと自己批判精神をもって、自らづくりだす運動です。「組織づくりは連絡から」と言われます。連絡のないところに組織は生まれません。人と人との繋がりがあって社会は成り立っています。信頼関係のないところには、組織づくりは難しいということです。しっかりと根を伸ばし、根を張り仲間に寄り添う努力を重ねることです。

労働者の唯一の力は、組織的な団結力以外にありません。「走れば回る風車」、風がなければ自らが走ることです。問題は、困難な時こそ私たちの構えが問われているのです。

私たちがめざすもの、労働者の世界観

歴史をつくるのは人間です。人間の歴史には、発展の法則があります。資本主義の経済的運動法則に添ってのみ、歴史がつくられるのです。「理論なき実践は盲目である」とも言われます。「理論の武器をみがく」日常的な学習運動が最も大切です。

まなぶ友の会運動は、「四つの課題を三つにまなぶ」大衆学習運動を基調としています。この意味を換言すれば、労働者は、唯物史観と『資本論』に学び、労働者階級の歴史的使命を自覚し、科学的社会主義に不動の確信をもって生き抜く人間になろう、ということです。展望があるから、希望が生まれる！ 仲間を信じることは、必ず力になる！ 信頼は宝です。自らが労働者の一員であることに誇りをもって生きていくことに意味があるのです。つまり、友の会運動とは、資本主義的常識をいっばい身につけた広範な大衆を組織するなかで、その思想を、生き方を変えていく運動と言えます。亀の一步一步の前進です。「学ぶことは闘いである」とは、こういうことです。この思いを継続発展させるためにも、家族ぐるみのたたかい、日常的な取り組みがきわめて重要で

す。

なくてはならない、家族ぐるみ

『月刊まなぶ』の思想的背景は、三池・安保のたたかいの中で生まれ、階級および階級闘争をまなぶ「はたらくもののほん」として成長してきました。三池のたたかいで欠かせないのが三池労働者運動を進める中での総括として導き出された「家族ぐるみ」のたたかいです。「家族ぐるみ」は、労働者が人間らしく働きつづけ生きつづけるために不可欠な、家庭の民主化という問題であり、団結の問題でもあり、労働者運動の基本的な課題ではないかとの理解が深まりつつあります。

特に資本への怒りを労働者階級として組織し、たたかうかぎり「家族ぐるみ」を抜きにしては、長期にたたかい続けることは困難です。同じ方向へ向かう構えがあつてこそ、たたかい続けることができるのです。そのためにも、家族みんなが本音を出し合える話し合いの場をどうつくっていくのか、お互いを認め合い、理解し合い、力を合わせ、一歩前へ歩みだす力をどうつくっていくかということが大切です。「家族ぐるみ」の運動が、大衆学習運動にはなくてはならない運動だということです。

6ブロックの統一に向けて

6ブロック統一の課題です。県協連は、「統一に向けて条件を付ない」という方針で望み、3ブロック（東北・中日本・九州）の窓口である中日本の保田さんと県協連の三宅副会長で話し合いを持ってきました。「保田さんが諸会議等で東京に出てきた時に時間が取れば話し合いの場を持つ」ということを確認し「連絡待ち」という状況でした。

「“待ち”の姿勢ではなく積極的に働きかけるべき」という意見もあり、県協連としては

「統一に向けた話し合いをしたいので、都合がつけば連絡をいただきたい」と再度要請するとともに、「お互いに交流することから始めては…」と提案してきました。保田さんからは、3ブロックの世話人会で相談してみたい、という返事をいただきました。

「連絡待ち」という状況は変わりませんが、できる限りコンタクトをとり統一に向けた道筋を模索していきます。

分散会の持ち方

分散会は、5～6人を単位とし、次の2点を重点に交流してください。

- ① 労働者として人間として、生活苦、資本への怒り等、どう生きようとしていますか。
- ② 自分にとって、第一学習会やまなぶ学習会は、どういう存在になっていますか。

なお、友の会に入っていない方、家族の方にも、発言できるように、座長さんの計らいで無理なく、円滑に進めていただきたいと思います。

以上をもって基調提案とします。